

社会科 地域学習の方法

佐藤照雄先生退官記念会編

目 次

刊行のことば	1
--------	---

第一部 地域への視点とその研究・学習の課題

◆地域とその学習への視点◆

学校教育と地域	佐藤照雄	8
地域の多元性と社会科の問題性	馬居政幸	17
社会科教育における地域把握について	池 俊介	26

◆地域学習の現状と課題◆

小学校社会科における地域学習の現状と課題	染葉 晃	35
中学校社会科における地域学習の現状と課題	羽田秀樹	44

◆地域学習の新たな課題◆

生活科への視点	鈴木儀一	53
国際理解教育への視点	鈴木 岐	63
時間認識への視点	小川 隆	71
空間認識への視点	竹田次夫	80
統合的な社会認識の視点から	月見里茂希	88
高校地歴科・公民科への視点	卯月 誠	97
民間教育運動における地域学習の課題	青島範明	105

○地域とその学習への視点○

地域の多元性と社会科の問題性

~~~~~馬居政幸（静岡大学）

#### 1 地域への視点

地域学習の必要性や意義についての論議は多い。地域学習の名を冠した実践も多い。それも社会科という一教科の立場のみでなく、各教科、道德、特別活動と、学校教育のいずれの分野においても論じられ実践されている。あるいは、生涯教育・学習（論）の浸透に伴い、学校の外でのまさに地域の人達自身による地域学習が、近年、とみにさかんである。

他方、地域学習の前提にある地域自体に関する論議はどうか。地域産業、地域経済、地域政治、地域社会、地域史、地域の教育力、地域に開かれた学校、地域医療など、多種多様であり、その学問分野も地理学、経済学、政治学、社会学、歴史学、教育学、心理学、医学など多岐にわたる。

厳密な定義は別として、仮に人と人の営みがおりなす場を地域と名付けるならば、あらゆる学問が地域に目を向けたとしても不思議ではない。特に、人間の社会的行為とその制度化された世界の構造を、固有の概念により探究する人間・社会諸科学にとって、地域は研究対象の宝庫といえる。

また、急激に進む情報化、国際化、高齢化など、かつてない変動期にあつて、人と人が共に生きる場を再構築することを意図する運動や活動、あるいは行政施策を推進する人達や組織にとって、立場の相違を越えて、地域は問題を見出す場であるとともにその解決を託す場ともなっている。

しかし、地域への関心が高まれば高まるほど、地域とその学習について一義的に定義することが困難になることも否定できない。一般に、特定の事象

が学の対象となるのは、その事象が従来の常識では理解できなくなり、新たな解釈が必要になった場合が多い。定義の曖昧さは、対象の多面性や可塑性を反映したものである限り、探究すべき価値の豊穡さを示唆していると考えられる。それ故、今日必要な地域とその学習に対する探究の出発点は、既存の研究に基づき厳密に一定の枠の中に地域を定義づけることではない。むしろ、定義をオープンにしたままで、地域という言葉により指し示される様々な事象の実体を改めて問うことから始めなければならないと考える。

ところで、社会科教育における地域学習の論点として、「地域で」学ぶのか、「地域を」学ぶのかという問題が指摘されることが多い。地域を、教育（学習）という「行為が生じる場」として捉える立場と、教育（学習）すべき「内容を求める場」として捉える立場との対立と要約できよう。

但し、この対立は、地域という言葉で指示する事象については、両者に合意があることが前提となる。すなわち、「で」と「を」の違いは、地域への「取り組み方」の相違に焦点を合わせたものであって、地域自体の相違ではないと考える。しかし、上述したように、今日の問題は、まさにその地域に対する合意が揺らいでいる故に地域とその学習への関心が顕著になってきたという事実にある。とすれば、社会科地域学習にとっても、先ず問わねばならないのは、「地域」という言葉で示そうとしている事象自体ではないか。地域という社会事象が多義的あるいは多面的な場合には、「で」と「を」という教育（学習）上の論点の基準自体が揺らぐことになるからである。

## 2 地域という社会事象の実体

### (1) 地域が示す事象とは

『地理学辞典』（二宮書店）の「地域」には、「一般には地表の広狭さまざまな部分を地域と称し」その地理上の特質の類似性により「等質地域（同じような地理的特質をもつ区域）」と「結節地域（対照的な多くの部分が中心的存在により統一されている区域）」に分かれると記されている。

他方、『社会学辞典』（弘文堂）には、「全体社会の一部分を構成する、政治、経済、文化上の諸特徴をもつ空間上の一定の範囲を示す」とある。

いずれも地理学者や社会学者にとっての厳密さを基準にした定義である。一定の空間上の範囲を示す点では共通だが、実質的な特性を示す内容はかなり異なる。一般に事典による定義は、各学問の研究成果や方法を簡潔にまとめたものである。従って、二つの定義の相違の意味は、いずれか一方が地域という言葉にとってより正しい概念や社会事象であるということではない。同じ地域という言葉であっても、学問により研究の視点や対象が異なり、地理学研究には社会学事典の定義は、社会学研究には地理学事典の定義はそれぞれ不適切ということである。そして本稿の焦点は、地理学でも社会学でもなく、学校教育、それも社会科地域学習にとっての地域である。

社会科は、他の教科と異なり、学習主体である子ども自身の社会生活を学習の対象とする教科である。それ故に、社会科の地域学習にとっての地域とは、地理学や社会学が対象とする事象である前に、何よりも子供自身によって「生きられた世界」でなければならない。すなわち、学習主体である子供達が「生活する場」が地域であると考えられる。

さらに、「生活する場」とは人と人が日常的に交わる世界である。したがって、地域という言葉が示す社会事象の主たる要素として、「生活世界」を構成する「人々の交わり」や「営み」を上げることができる。

また、義務教育段階での子供達が日常的に「生活する場」としての空間上の範囲は、ほぼ学区から市町村の行政区の間に想定できよう。

もちろん、交通機関の変化や情報化の進行により、子供の日常は、親のマイカーによる移動やテレビ・雑誌を媒体とするコミュニケーションを介して多面的に広がっているといえる。このことの地域にとっての意味については改めて考察する。だが、子供達が日常生活で直接行動する範囲自体は学区から市町村の間に止まるだろう。むしろ、小・中学校では、学区と行政区の範囲を基準として、学校の外での子供達の日常行動をコントロールしている場

合が多いのではない。他方、市町村行政や各種地域組織の方も、都市化の進行に伴い旧来の地域性が変化する中で、実質的な地域区分の基準を小・中学校区に求め、様々な地域活動が学校区を単位に実施されている。

その意味で、学区を基準とする子供達の日常生活の行動範囲は、学校によって枠付けられているといった方がより実体に近いかも知れない。また、親を始め大人は職業等により居住空間と活動空間がズレる場合が多いが、子供の場合は両者が一致するという意味での地域の住民であるともいえる。

以上のことから、子供達にとっての地域への問いは、子供達が「生活する場」で「交わる」人達の実態への問いとして提起することができる。

そこでその実態を問うための一例として、静岡県小笠郡浜岡町で実施した教育課題調査で明らかにした学習行動による地域住民の類型を見てみたい。

## (2) 浜岡町での調査から

浜岡町は中部電力による原子力発電所の建設を契機に昭和40年代後半から急激に都市化した町である。そのため、人口約二万の小さな町だが、旧来の農業を基盤とする地域組織や生活様式と、新住民や若者を担い手とする都市的文化が混在する町となっている。調査はそのことを、表一1に示すように、町内の成人が八種に分かれるという結果により証明した(1)。従って、浜岡町の場合、「地域住民」といっても、各類型間で特徴はかなり異なる。詳細は注の文献に譲るが、「居住している場」としての地域と関係する「活動」や「学習」への参加度により浜岡町の人達は次のように二分される。

①地域参加組 類型A B C G H 計58.3%

②地域不参加組 類型D E F 計41.7%

さらに地域参加組内でも地域との関わり方は異なる。例えば、類型B「活躍する役職おじさん」は地域活動のみ積極的なのにに対し、類型G「活躍する中年婦人」は集団での学習活動に積極的。また類型H「インテリシルバーグループ」は個人での学習が得意。類型Cは地域活動とスポーツは積極的だが勉強はダメ。つきあい程度に地域活動のみ参加するのが類型A「がんばる母

表一1 学習行動による浜岡町の住民類型

|                          |                                                                                                       |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 類型 A<br>「がんばる母さんグループ」    | 三十代後半の子育て中の地元の女性が多く、つきあい程度の地域活動以外には学習していない。19.8%                                                      |
| 類型 B<br>「活躍する役職おじさんグループ」 | 地域活動に熱心な地元の中高年の男女。いわば地域有力者、特に男性はほぼ全員が役付き。農業に従事し講習会や旅行にはよく積極的に参加するが勉強は苦手。7.5%                          |
| 類型 C<br>「頼れるお父さんグループ」    | 地元の三十代後半男性。地域活動には進んで参加し役職も持っている。特にスポーツは欠かさない、学歴も低くないが、美術などを鑑賞すること以外には特別な勉強はしていない。いわば、浜岡のこれからの担い手。6.2% |
| 類型 D<br>「新住の若い専門家グループ」   | 浜岡に新たに住むようになった若い男性が典型。学歴が高く、事務や専門職が多い。学習意欲は高く、テレビや通信教育で学びスポーツや資格を取ることに高い関心があるが、地域活動へは参加しない。11.1%      |
| 類型 E<br>「るるんギャル・ママグループ」  | 浜岡に新たに住むようになった主婦を含めた若い女性が典型。地域に関しては拒否に近く本調査が前提とする学習行動には参加せず。13.1%                                     |
| 類型 F<br>「土地っ子若い衆グループ」    | 地元の若い男子が中心。そのためか地域活動を拒否しないが、特にやるわけでもない。高卒で工員や専門職が多く、資格を取ることは熱心。だが、他の勉強には関心なし。17.5%                    |
| 類型 G<br>「活躍する中年婦人グループ」   | 地元の中年以上の主婦が中心。自営や農地を持っている人が多い。文化祭に出品し、自ら参加するなど、浜岡で行われる学習活動に最も熱心に関わる人達。17.5%                           |
| 類型 H<br>「インテリシルバーグループ」   | 地元の学歴の高い高齢者の男女。農業に加え会社経営や専門・自由業が多い。全般的に学ぶことに積極的で、特に個人で学習することが多い。いわば、現在の浜岡のリーダー。7.3%                   |

表一2 産業別人間関係（地域）の特性

| 産 業        | 関係の契機       | 人間・集団との関係の特性                             |
|------------|-------------|------------------------------------------|
| 第一次産業中心の社会 | 地 縁 ・ 血 縁   | 同質・身分・伝統を前提とした公私未分化の非選択的な人間関係            |
| 第二次産業中心の社会 | 社 縁 ・ 学 校 縁 | 同質・平等・競争・利害を前提とした集団への実質的に非選択的な帰属関係       |
| 第三次産業中心の社会 | 情 報 ・ 知 縁   | 選択の契機を介在させた部分的人間関係（横並び階層化 or 棲分 or 共生関係） |

さん」で、実は、このグループに属する人が一番多い。

さらに、地域を無視もしくは拒否する対象として捉える不参加組の四割を含めると、住民の地域観を一義的に定義することは非常に困難になる。

ちなみに、平成元年度小学校学習指導要領では、生活科の新設に伴い、社会科は第三学年から始まるが、その最初の内容は次のようである。

「自分たちの地域の人々が、公民館、図書館などの公共施設を利用している様子及び地域の清掃や交通安全などの活動に参加している様子を観察したり調べたりして、地域の人々は協力して生活の向上や住みよい環境づくりに努力していることに気付くようにするとともに、自分も地域社会の一員として協力できるようにする。」

この内容に対応する「地域の人々」には、浜岡町の場合、「新住の若い専門家」「るんるんギャル・ママ」「土地っ子若い衆」の合わせて約4割の大人が入らないことになる。なぜなら、この人達が「地域の清掃や交通安全の活動」に参加する可能性は少なく、その意味で「協力して生活の向上や住みよい環境づくりに努力している」ことにはならないからである。

さらに、「自分も地域社会の一員として協力できる」という観点を生かすために、「清掃や交通安全の活動」をする地域の人達の姿を子供達が見学したり参加する場面を取り入れた授業を展開しようとするならば、「地域の人々」に入るのは、仕事を休まずに参加可能な「活躍する役職おじさん」「活躍する中年婦人」、合わせて二割五分。それに「がんばる母さん」の一部が子供達の母親としてのPTA活動の一環として参加できるかどうか。

要するに学習指導要領の基準で見ると、「地域の人々」とは、浜岡町の場合、大人の四人に一人だけになる可能性もあるということである。

そしてこのような問題が、浜岡町のみの問題ではないことはあえていうまでもないであろう。むしろ急激に都市化したとはいえ浜岡はまだ旧来の地域構造が生きている町である。その浜岡でさえ住民は多様化していると考えた方が全国の小学校を囲む地域の実態を捉える上で有効と考える。筆者も参加

して調査した静岡県全体を対象とする「県民学習調査」(『県民の学習行動と意識』昭和62年3月 静岡県教育委員会)でも、地域活動への意欲と参加率は、ともに都市化が進むにしたがって低くなることが確認されている。

とすれば、東京を代表に大都市の場合、社会科が期待する地域住民を父母も含めてどの程度の「実像」として描けるのであろうか。年令、性、職業、……、その像と数はかなり限定されたものにならざるをえない。

### 3 地域の多元性と社会科教育の問題性

表一2は産業構造の相違による人間関係や個人と集団との関係の特色を、上野千鶴子の地域論に触発されつつ、筆者なりにまとめたものである(2)。

農業を代表に第一次産業中心の社会では、生まれ住む「土地(地縁)」と「家(血縁)」がそのまま人間関係の絆を形成し、個人による「選択」の余地はない。あるいは、所属する集団から独立した個という人間のあり方自体がないともいえる。それが近代的価値の浸透と社会の工業化の進行にともない集団から個人が分離する。すなわち、「自由」を「競争」に、「平等」を「機会」に置き換えた社会制度としての「学校」による社会移動を介して、一定の目的に基づき組織した「会社」を代表とする「職場組織」を「選択」し、その中で人間関係が形成されるようになる。そこでは、原則として、従来の地縁や血縁からは自由に自分の所属する集団を「選択」できる。

だが日本では、義務教育段階での学校選択は私立学校に進む少数者にしか許されていない。高校・大学の選択も義務教育段階での成績により進むコースが決定される(トラッキング)傾向を否定できない。加えて、どのコースに入るかが、勉強部屋や家庭教師や塾の質の高さに依存し、それが親の収入や学歴と相関するとすれば、実質的に選択の幅は狭いといえる。さらに、学(校)歴とリンクした企業選択、あるいは昇進や給与のシステムに規定された職場という集団の絆は益々選択の幅を狭くする。

他方、第三次産業の中での人間関係の「機縁」は「情報・知識」である。

特性は常に選択の契機を内在した可変的な関係。その象徴がキー操作のみで世界中とコミュニケーションするコンピューターネットワークである。また、日常的には、住む場は離れているが電話や車を用いて子育てのための情報を交換し、相互の必要に応じて子供の面倒を見合う若い母親達の共同保育のグループに見ることができよう。

さらに、三次産業化した社会での人間関係を地域という観点から見て特筆すべきことは、上記三種の人間関係のパターンがいずれも同一の居住空間に多元的に併存していることである。例えば、浜岡町の人達にとって地域は、八種の現実が層をなして多元的に存在する場ということになる。そして都市化の進行はこのような現実の多元化の進行をも意味するといえる。その際に重要なのは、三種の人間関係をいずれか一つに統合することではなく、それぞれの独自性を生かしつつ相互に知り合う「縁」がいかにか創造されるかである。すなわち、多元的な現実を多元なままに相互に結んでいく（ネットワーキング）ことこそが「情報・知識縁」の最も重要な働きである。

浜岡の「るんるんギャル・ママ」は、婦人会の口うるさいオバサンがいる地域活動は嫌い。でも子供の幼稚園で知り合ったオシャレな女性とはボランティア活動に参加する。ところがボランティアの場で婦人会のオバサンと再会し互いに再認識。話しがはずみ、近所づきあいはじまる。

このような異質な者の間にコミュニケーションが生じる過程こそ今日的な課題としての「地域づくり」の過程であると考え。そして、このような意味での「地域づくり」を、子供が自分の日常生活の中で交わる様々な人達と間に創造する試みが、社会科地域学習の今日的課題であると考え。

しかし、社会科も含めて、一般に地域とその学習が論じられる際に、一次産業的人間関係のみで「地域住民像」を描いていないか。あるいは非選択的な地縁・血縁でのみ結びつく世界として「地域」を捉えていないか。

人間は社会事象を原理的に相対的なものとしてしか認識できない。それをあくまで一義的に規定できる世界に統合するか、多様性を前提とした認識を

育成するかは、社会認識の教育への最も重要な問いである。筆者はそれを社会認識の教育の問題性として位置づけた<sup>(3)</sup>。また、戦争の反省において新設された社会科という教科は、後者の立場からこの問題性に対処しようとする試みであったと考える。そして、民主化のシステムと高度経済成長を介した社会の高度産業化は、原理ではなく社会的現実として多元性を日常化した。

しかし、地域学習は、一義的に規定できなくなった社会的現実とその秩序を、改めて一元的に再構成する方法として捉えられてこなかったか。いいかえれば、ともすれば大人の居住空間としての地域に子供を同化させること、あるいは教師が用意する学習課題を地域の事象を通じ子供に同意させることを前提として進めてこなかったか。「地域に根ざす」教育、「地域で学ぶ」教育、「地域を学ぶ」教育と地域学習の立場は様々であるが、教育論上や政治的立場の相違に関わりなく、いずれも教え学ばせることに急で、非選択的な地縁・血縁的な視点から自由な地域観に基づいた、子供一人一人の学校の外の日常生活を内面的に理解した立場からの実践に出会う機会は少ない。

従って、今日の社会科地域学習にとって最も重要なことは、子供個々の多元的な社会認識を、相互にコミュニケーションできる方法とともにいかに育てるかである。そのためには教師自身が子供一人一人の学校の内と外の日常性を共有し、子供の現実を支える様々な人と人の結びつきとしての地域とコミュニケーションできるネットワークを張ることに挑戦することであると考える。

#### 【文献】

- (1)角替弘志との共著(1989):学習行動による住民類型とその意識特性にみる地域生涯教育計画の課題(『生涯教育学会年報 第10号』)
- (2)上野千鶴子(1984):祭りと共同体(『地域文化の社会学』井上俊編 世界思想社)
- (3)拙稿(1986):大学における社会科教育についての一試論(『教科教育研究第3集』日本教育大学協会編)

## ◆地域学習の基盤◆

- 地域に開かれた学校づくりと地域学習……………藤田源大… 114
- 地域教育計画の中での社会科カリキュラム  
—中村小学校社会科カリキュラムを事例として—……増田 富… 123

## 第二部 地域の研究方法と実践

## ◆地域研究論◆

- 地域研究の課題—地域とは果して陸だけか—……………若林淳之… 132
- さまざまな場としての地域  
—この地に人はいかに住まうか—……………杉田泰一… 150

## ◆地域研究の方法事例◆

- 赤石山地南部におけるかつての焼畑と高位緩斜面……………松本繁樹… 158
- 歴史学からの視点……………小和田哲男… 168

## ◆地域研究の実践事例◆

- 富士川流域における地域文化の一考察  
—交通路の変遷が河川流域に与えた影響—……………中尾欣司… 176
- 近世交通史の一齣—気賀関所を中心として—……………塚本裕巳… 184
- 越前から移ってきた武士団—斯波氏被官考—……………森田香司… 192
- 歴史的空白のない地域史学習……………赤澤敏彦… 200

## 第三部 地域の学習方法と実践

## ◆地域学習実践の方法◆

- 副読本を活用した地域学習実践の方法……………星川昇山・染葉直彦… 210
- 地域サークルの共同研究による地域学習実践の方法……………大森 孝… 220
- 地域変容に対応した地域学習実践の方法……………小泉幸伸… 228

## ◆小学校における実践方法とその事例◆

- 生活科授業研究への視点……………芹澤重義… 236
- 遊びを通して学ぶ社会と自然—地域や学校の  
遊び空間を生かした合科的学習の実践—……………松木孝夫… 245
- 地域の素材を生かした社会科学学習  
—吉永の探検、湧水を追って—……………相場信彦… 255
- 富士山麓における和紙づくりを生かした  
製紙工業の学習……………内田昌宏… 263
- 子供達が教材を創っていった  
「静岡市の消防の仕事を探ろう」の実践 ……………鈴木功一… 271
- 「世界に伸びる静岡市のプラモデル産業」の実践 ……………倉澤庄次郎… 280

## ◆中学校における実践方法とその事例◆

- 野外観察の実践による身近な地域の学習……………勝又将雄… 290
- 地域史教材を生かした歴史の授業構想……………西尾哲孝… 299
- 身近な教材を取り入れた流通システムの学習……………松本敬人… 310
- 中学校選択教科としての社会科地域研究の実践的  
プラン—「セミナー学習」の導入・実践から—……………村松久仁治… 318
- 佐藤照雄先生年譜・主要著作目録…………… 328
- 執筆者一覧（執筆順）…………… 333

シリーズ **教育の間** 9 総合企画＝水岡 順

# 教師と父母の間

学校と家庭を結ぶ教育

山本恒夫 | 編著